天上の竹（ちきゅうのいのち）

今は昔、人類の未来を任されし使者がありき。

ある時、月の内部には竹林のごとくわたる人類の英知が結集されし理想郷が存在しき。

来たるべき未来に向け、そこには様々なる活動が行はれたりき。

天上界がけしきをもちて出でたるを見て、いつもより物思いにふけるようすになりき。

【現代語訳】

今は昔、人類の未来を託された使者がいた。

ある時、月の洞窟には竹林のように広がる人類の英知が結集された理想郷が存在した。

来たるべき未来に向け、そこでは様々な活動が行われていた。

天上界が趣きをもって出ているのを見て、いつもより物思いにふけるようすになったのである。

蛇腹状の ETFE 皮膜を纏ったフレキシブル太陽電池は、月面の寒暖差を利用し、昼夜通して伸縮することで過酷な環境下でも発電を続ける

展望デッキでは地球を眺めることができ、滞在者は心理的な安らぎを得るができる。
遠い昔の記憶を呼び覚まし、精神的な健康を保つ。

5 世帯 ×2 シャトルの住居ユニット

1 世帯

居住ユニットがずれることで生まれるスペースは滞在者の移動・運動・交流空間へと変わる。
又、ここは宇宙服を着ずに活動できる中間領域となる。

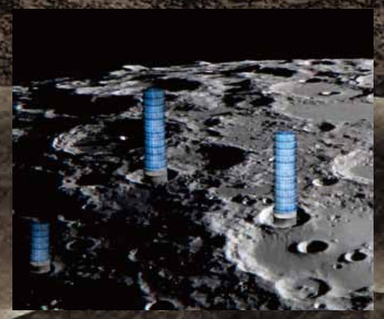
スタック用の生命体を保管

第一章　月への旅立ち

月への移住計画が進行し、5 世帯が暮らせる住居型ロケットが開発された。人類の未来を託されし１０世帯の使者団は月へと旅立った。

月面に無数に空いた垂直洞窟。様々な大きさの穴が存在するが、溶岩の流れで生成された空間は内部で繋がっていた。

使者団を乗せたロケットは、身を潜めるように宇宙線や隕石から守られた洞窟内へと着陸し居住を始めた。



やがて、ロケットは次々と飛来し洞窟内に潜んでは各々が核となり、月面　洞窟内に人類の生存圏を拡大させていった。

第二章　生命の塔

ロケットの着陸後、使者団はロケット下部に搭載されたユニットを機体から切り離した。そこには地球環境の資源が貯蔵されていた。

洞窟の最下層は次第にインフラ整備が進み、資源ユニットはスタックされ、切り離された機体下部はステーションとして機能した。

地球の恵みがスタックされ『生命の塔』が築かれた。そして、各棟が海の塔や森の塔など地球の豊さを感受させ、月の暮らしが色付く。

第三章　帰還

小惑星の衝突により、地球は壊滅した。幸いにも、開発されていた住居型ロケットが地球再生の鍵となり、使者団はロケットに資源ユニットを搭載し地球へと向かった。

地球に舞戻った使者団は、資源ユニットを用いて地球環境の再生を始めた。月への移住と同様にロケットが核となり再び故郷を取り戻していくのであった。

あらすじ

月は古の時代から神秘的なものとして語り継がれてきた。その月に人類が住み始める。人類はこの神聖な場所を地球のように汚さないと決意した。月を開拓しない代わりに“地球の恵み”を少しづつ輸送しては、スタックしていくことにする。『生命の塔』の完成。それを運ぶのは 5 世帯が暮らせる住居型ロケットであり、第一波は 2 機のロケットで海水を持ち込み、『小さな海の塔』を建てた。

洞窟とドッキングしたロケットはそのまま住処へと変わる。ユニットは軸を中心に自在に操作でき、乱立する『塔』を借景する。窓からは人類が 1/6 の重力で“地球”を疑似体験している光景を眺めることができる。洞窟内は地球環境のサンプリングで満たされつつあった。

小惑星の衝突はあまりに突然だった。壊滅した青い星は次第に輝きを失い、人類は二度と帰れない地球に思いを馳せた。しかし、我々人類には『生命の塔』があった。これに目をつけた若き２人は、資金を募り、次は月からこの塔を打ち上げることを計画する。